

言葉のあや織り

幽明の糸紡ぎ

言葉の

その、先？

それは 蜃気楼の観天望気なのか

「ことば」の手前で

これと指しえない

かまどにくべられたナナカマドの炎

なんと名付けよう、この未病

「ことば」を失う、呆然のうむい

一度も所有したことの無いものなのに。

「失った」からといって：

「失語」とは言えない

九十九里浜の塩砂に埋もれるがよい

「自分のことば」などという、アサリの砂吐き

「コミュニケーション」という、グチ（イシモチ）の吐息

「解る、判る、分ける」という、カワハギどもの歯ぎしり

言葉は、

一匹の 虫さへ なぞる こと が でき ない

分節しえないナナフシ（七節）にオオカマキリの羽を与え

朝あしたの空に解き放つのだ

〈名辞〉

徒いたずらに名付けてはならない

生きていることの微熱をかき消すことになる

けれども瀕死を生きるしかない大言海の生態系
水底に渴くアリアドネーよ

視えて、手繰れないその繭糸
響いて、聴こえないその音色

いったい何を旋律するのか
はたして何に戦慄するのか

音信不通の糸電話が微かに震える

〈日常の異状〉

あたりまえに 鳥たちのさえずりで夜が明け

あたりまえに 虫の音で夜が更け

あたりまえでなく 酔夢に落ち

いつものように 夜明け前の夢魔に見舞われる

いずこに向かおうとするのか、夢でも現でも異郷に行く者よ

何処に帰ろうとするのか、廃墟で目覚めたうむいの流亡者よ

「この追放には 救いが無い。彼には、失われた祖国の想い出もなく、
約束の地の希もないからだ」(カミュ『異邦人』)

〈夢魔の戸口〉

草むらに倒れ伏す棗の 病木^{わくらぎ}

かりそめの新芽が木霊の息づかいを伝える

裏山をわたる夜半の 野分

シヴァ神は踊る 屋根打つドンダリの連弾

盲目たりえずに ひととぶつかる、この 歩み

越境者の勲章か、この擦過傷、咬傷、後遺症

他動詞としてふるまいはじめた「つながらる」

コヨリの組紐で繋がっている精霊船の明かり 灯り

その名 津波 なわすれそ、決壊したのは
防波堤なのか、ロキの結界なのか

巡礼者を 玩^{もてあそ}ぶスフィックスの問いそして 異郷人の問い返し
答えてはならない 言霊の二の舞 ヒラリひららり

天地返しの大波は、夢の中で立ち尽くすわが足元を洗い^{さら}洗い^{すく}掬い続ける

〈ネシアの繚乱〉

ミクロネシア、ポリネシア、メラネシア
はるかな南の洋上にうまれた台風が

海原はるかヤポネシアの渚に、うねりをもたらす

安房の海、サラシ洗うセンヅツ岬の突端

鈎素^{はりす}を垂らす生命の海は釣り人の背後で、死の海に豹変する

千切れ解きほぐれたクラゲの毒針なのか

飛沫^{しぶき}を受け悲鳴を上げながら 天罰的毒針療法にいそしむ

へあわわへ

天津雨雲、興津沖波、色失セ、遠雷ノ閃光ソシテ、薄墨ノザワメキ
ウネリ寄スル波ノトドロニ、真白ク裂ケ碎ケ舞ヒ

蒼穹わけみたまの分光わか、刹那キラに燦キラめく波頭 ほの青く

魂いざなを誘いざないゆさぶるその光あわを気泡あわの内に抱いだいては

モノトーンの水面みなもそこかしこに命を吹き込み

はるか太古からの胎動たいどうに還元しつづける

うねり上がる波のその中

数匹のサヨリが横切よこぎってゆく

へ塩原、木の葉石へ

どのように

言表しさすれば…。

葉裏はらに凝結こうけつし

化石こし化する

この異和いわの乱反射らんはんし

どんな偏光へんこうグラスを透しても

猥雑わいさつな干涉波かんしははクリアできない

事の端はし、意味いみの退席たいせきし

木の葉きのは、姿態すがたの堆積たいせきし

言葉の化石こしとなり果て…。

へサンマリノの沈黙へ

誰かしらないあなたの
沈黙の領きを視ることはできない

けれど

思いのチャルカを廻し^{うむ}

有無意の糸を紡ぎ続け

大言海の岸边に垂らすなら

わたしもまた、いつか

仄かに領けるだろう

風を切る糸電話の震えが

確かに旋律する

その波の

脈拍の

高鳴りを